



放射線治療科 医長  
朝生 智之

## がん以外の疾患でも活躍する放射線治療

放射線治療は主にがんに対応して行われる治療法ですが、その他の病気に対しても有用な場面があります。今回は、それらの中でも比較的身近なものをお紹介します。

一つ目はケロイド。皮膚の傷痕が固く盛り上がる疾患です。手術の痕やピアスを開けた穴にできる例が多いです。見た目の変化に加えて、かゆみや痛みを伴つたり、取り除いても再発する場合があります。そういった手強いケロイドの再発を防ぐため、固くなつた部分を手術で切り取った後（当院では手術と同日）に放射線照射を行います。平日3～4日間の通院治療で、手術部分の皮膚に限定して放射線を当てます。主な副作用は一時的な皮膚炎（日焼けのような変化）です。

二つ目は甲状腺眼症。眼球が収まっている部分（眼窩）の炎症によって、見え方の異常・眼球の突出・眼の痛みなどを生じます。主に甲状腺

の病氣に関連して現れます。甲状腺機能が正常でも免疫系の異常で起ることがあります。

中等度から重症の場合に、症状を和らげる目的の放射線治療が選択肢に挙がります。左右から眼窩を挟み込むように放射線を当てる、平日10日間の治療です。副作用として結膜炎・角膜炎などが起きますが、ほとんどは軽症です。また眼のレンズ（水晶体）に照射されると後に白内障を生じますので、可能な限りレンズを避ける工夫をします。発症した場合も眼科手術で治療可能です。

30年ほど前、「割り箸問題」が世間で話題になっていたことを覚えている方も少なくないと思います。「割り箸は使い捨てだから環境に悪い」「割り箸を使うと森林破壊が生じる」などといわれ、外食産業においては、割り箸からプラスチック製箸に変更されたり、外食時には「マイ箸を持参しよう」という運動が起つたりしました。しかし、この運動も下火になり、「割り箸利用が森林破壊を起こす」などといふ考え方ではなくていきました。実際に割り箸の多くは、間伐材や製材時の端材を利用して作られている環境にやさしい製品なのです。

一方、10年前の2015年、1枚のセンセーショナルな写真が世界中で報道されました。覚えている方も多いと思いますが、ウミガメの鼻にプラスチックストローが刺さった写真です。この一枚の写真をきっかけに「分解しないプラスチックは環境に悪い」となりました。そこから、「プラスチック



主治医にお尋ねください。  
30年ほど前、「割り箸問題」が世間で話題になっていたことを覚えている方も少なくないと思います。「割り箸は使い捨てだから環境に悪い」「割り箸を使うと森林破壊が生じる」などといわれ、外食産業においては、割り箸からプラスチック製箸に変更されたり、外食時には「マイ箸を持参しよう」という運動が起つたりしました。しかし、この運動も下火になり、「割り箸利用が森林破壊を起こす」などといふ考え方ではなくていきました。実際に割り箸の多くは、間伐材や製材時の端材を利用して作られている環境にやさしい製品なのです。

海洋に流出した「プラスチック」が悪いのではなく、プラスチックを「海洋に投棄したこと」が悪いのです。割り箸もプラスチック製品も、作る側、使う側のモラルの問題なのではないでしょうか。



静岡県立農林環境専門職大学  
短期大学部 教授  
三井 勝也

## 割り箸問題とプラスチック問題

